

# 新石器化と都市化のはざま

## —イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の第2次発掘調査(2025年)—

小高 敬寛 金沢大学国際基幹教育院准教授  
前田 修 筑波大学人文社会系准教授  
池山 史華 日本学術振興会特別研究員 PD(筑波大学)  
早川 裕弐 北海道大学地球環境科学研究所准教授  
板橋 悠 筑波大学人文社会系准教授  
ヘムン・ヌリ・ファッタ スレーマニ文化財局局長

## Between Neolithization and Urbanization: Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan, the Second Season (2025)

ODAKA, Takahiro Associate Professor, Institute of Liberal Arts and Science, Kanazawa University  
MAEDA, Osamu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba  
IKEYAMA, Fumika Post-doctoral Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science (University of Tsukuba)  
HAYAKAWA, Yuichi S. Associate Professor, Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University  
ITAHASHI, Yu Associate Professor, Institute of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba  
FATTAH, Hayman Nuri Staff, Slemani Antiquities and Heritage Directorate

### 1. はじめに

後期新石器時代(前7000/6600~5400/5200年頃)は、「肥沃な三日月地帯」で新石器化を遂げていた人びとが、銅石器時代(前5400/5200~3100/3000年頃)の終わりに都市文明が開く、メソポタミア低地の開発へと乗り出した時代である。私たちはそのプロセスを定量的かつ実証的に追跡することを目指し、イラク・クルディスタン地域スレイマニヤ県南東部にて、シャカル・テペ(Shakar Tepe)とシャイフ・マリフ(Shaikh Marif)という二つの先史遺跡を調査してきた(Odaka et al. 2020, 2023a, 2023b, 2025; 小高ほか 2025)。これらの遺跡が立地するシャフリゾール平原はザグロス西麓の山間盆地であり、「肥沃な三日月地帯」の東翼に位置しながら、ティグリス河の支流ディヤラ川を介してメソポタミア低地へと通じている。新石器化と都市化のはざまを探るうえで恰好のフィールドといえるだろう。

### 2. 2025年の発掘調査

2025年8月23日から9月18日にかけて、シャイフ・マリフ遺跡の第2次発掘調査を実施した。この遺跡は、三つの低い遺丘(I~III号丘)からなるが、このうちIII号丘には先史時代の遺物の散布が認められない。II号丘は2022年に発掘を実施し、前6100/6080~

6000年頃の考古学的証拠が捉えられた(Odaka et al. 2023a)。残るI号丘はおおよそ径100mの平面規模をもつ遺跡最大の遺丘であり、今回はその西寄りに東西14m×南北2mの調査区(D区)を設けて発掘を実施した(図1)。

調査区の地表は東側が高いものの、傾斜は緩く標高479m台に収まる。現在、遺丘全体で耕作が行なわれており、現代の土坑がいくつも掘り込まれていた。厚さ1m近くの表土層の直下には後期新石器時代の文化層が2m弱の厚さで堆積しており、地表から深さ2.5mほどで自然堆積(地山)に到達した(図2)。発掘された文化層は複数の層位に区分できそうであるが、詳細は検討中である。

シャイフ・マリフ遺跡は2012年にシャフリゾール・サーヴェイ・プロジェクトによって踏査されているが、その折にI号丘で表面採集された資料の過半数は歴史時代の土器であった(cf. Odaka et al. 2019)。現在でも地表に後世の遺物の散布がみられるものの、今回の発掘調査ではそうした時代の文化層を検出できなかった。また、遺丘の最高地点と調査区とのあいだにさほどの標高差はなく、調査区を含む遺丘の西半に歴史時代の文化層はあまり遺存していないであろうことが推察された。遺跡は臨在するダム湖の水位上昇によってたびたび水没するため、侵食によって消失したのかもしれない。

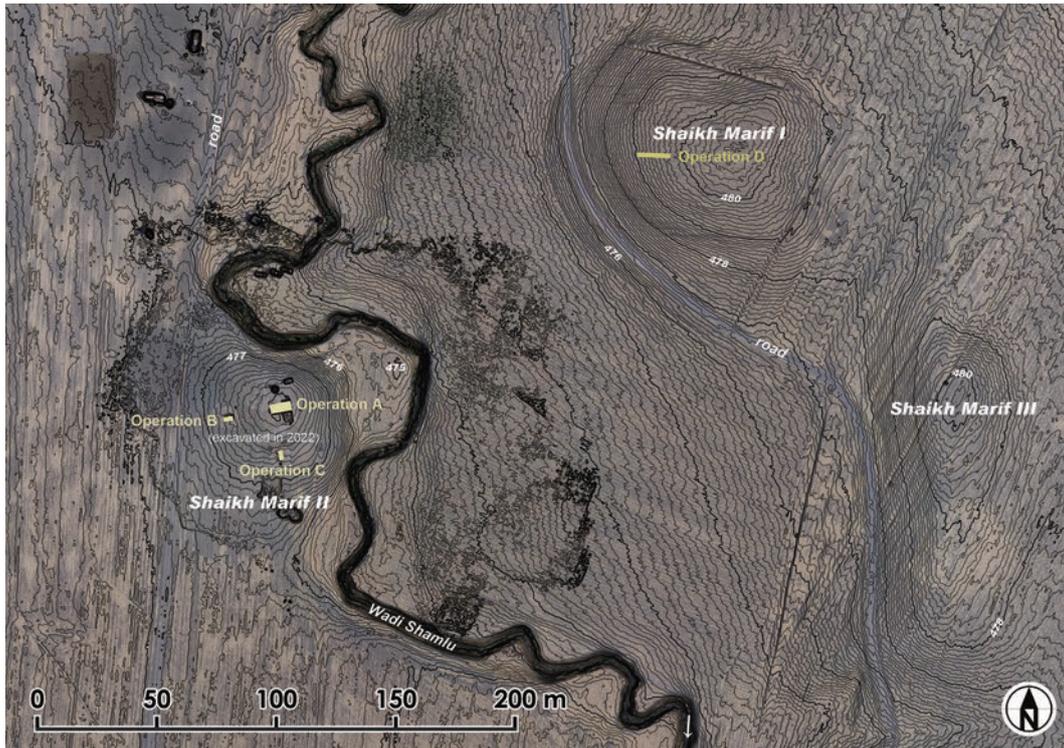


図1 シャイフ・マリフ遺跡の地形と調査区の配置

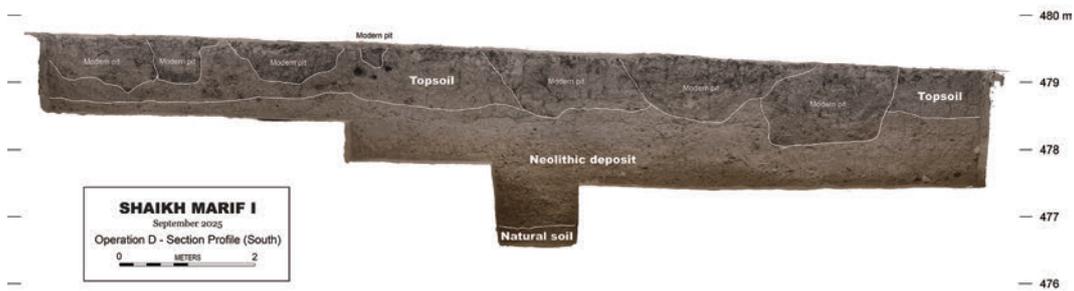


図2 D区の土層断面(南面)

### 3. 検出遺構

現代の土坑はさておき、今回の発掘調査において明確な建築遺構は残念ながら検出できなかった。しかし、比較的深くまで掘り下げた調査区の西側、約三分の二の範囲では、遺存状態の良好な遺物が集中して出土した(図3)。これらの遺物は標高477.5mから478.0mまでのあたりで、おおよそ3か所にまとまりながらも、互いに隣り合いつつほぼ全面に広がっていた。大多数は完形にまで復元できそうな個体を含む土器(図4)であったが、少数の石器や動物骨なども含まれ、特に西端のまとまりからは大きめの石が顕著に出土した。それぞれのまとまりには高い一括性を認めるのが妥当ではあるが、分布は必ずしも水平ではなく、近接する遺物どうしても高低差のみられる場合があった。こうし

た出土状況は、短期間のあいだに多量の遺物を乱雑に廃棄した結果を示すものと考えられ、大きな石のまとまりは、解体された建築物を粗雑に片付けた跡かもしれない。

また、この遺物集中域のやや上方からは、黒曜石製のサイド=ブロー・ブレイド=フレイク25点とサイド=ブロー・ブレイド=フレイクの石核2点が径0.5mほどの範囲からまとまって見つかった。うち3点は接合でき、石器製作工程を直接的に語る稀有な証拠が得られた。

### 4. 出土遺物

出土遺物の大半は土器であった。表土層や現代の土坑などに包含されていた数点の歴史時代の土器やハッスーナ標準土器を除くと、圧倒的多数(口縁部片数



図3 遺物集中域(部分・東から)



図4 遺物集中域の土器出土状況(部分・南から)



図5 粗製植物混和土器(上)と精製植物混和土器(下)

で約81%、重量で約97%)を占める粗製植物混和土器とわずかな精製植物混和土器という、2つのウェアグループからなっていた(図5)。粗製植物混和土器は北メソポタミアの原ハッスーナ土器に類似するものであり、また、精製植物混和土器はしばしば器面に赤褐色の化粧土やミガキ調整が施された、やや小ぶりの土器である。このアセンブリッジは2019年と2024年に発掘したシャカル・テベ遺跡A区下層のそれとほぼ一致し、帰属年代はこれまでの放射性炭素年代測定から

前6400/6380~6100/6080年頃と推定される。すなわち、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘の居住に先行する年代であり、表面採集資料の型式学的検討にもとづく事前の予測(Odaka et al. 2019)とも一致する。

後期新石器時代のコンテキストから出土した打製石器の石材は、チャートが819点(約85%)、黒曜石が145点(約15%)であった。シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘やシャカル・テベ遺跡Ⅰ号丘における後期新石器時代の例(3%前後)よりも、黒曜石の占める割合がかな

り高い。ムレファティアン伝統に顕著な押圧剥離によるチャート製の石刃や石核が乏しく、それらは在地で製作されていなかったようだ。他のチャート製石器はほぼ遺跡周辺で採れる石材が使われているが、なかでも2点出土した大型の石刃は、シャカル・テベ遺跡を含むシャフリゾール平原やキルクーク近郊の前7千年紀後葉の遺跡にのみみられる、特異な石器である。南東アナトリア産と推定される黒曜石製石器では、47点のサイド=ブロー・ブレイド=フレイクと5点のCT石刃が特筆される(図6)。北メソポタミアの後期新石器時代に特徴的とされるこれら石器の存在は、当時の地域間関係を考えるうえで示唆的といえる。

他に、動物骨や貝殻、カタツムリの殻といったいわゆる自然遺物はもちろんのこと、土製の紡錘車や投弾、

石製ビーズ(図7)、骨製の錐などといった人工遺物も出土した。

## 5. おわりに

シャイフ・マリフ遺跡 I 号丘における 2025 年の発掘調査は、前 6400/6380~6100/6080 年頃と思しき文化層の存在を明らかにした。そこからの検出遺構や出土遺物は、II 号丘における発掘調査成果とあわせて、後期新石器時代を通じたこの遺跡の歴史を物語ってくれる。とりわけ、高い一括性を示す遺物の集中域は、物質文化の詳細を探るうえで貴重な資料になるだろう。

計4つの遺丘において2019年から続けてきた発掘調査の積み重ねにより、シャイフ・マリフ遺跡およびシャカル・テベ遺跡における先史時代の層序は、これ

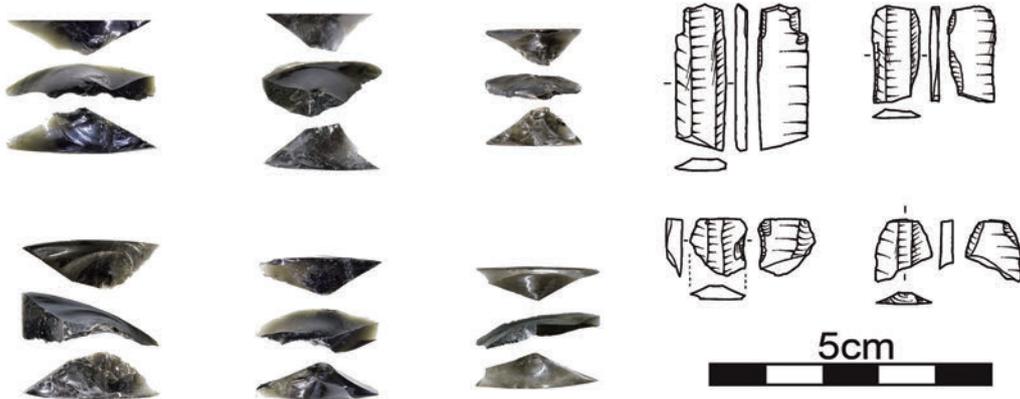


図6 黒曜石製のサイド=ブロー・ブレイド=フレイク(左)とCT石刃(右)



図7 出土土製品・ビーズ類

でおおよそを把握することができた。しかし、シャフリゾール平原における後期新石器時代から銅石器時代にかけての文化変化の追跡を目指す、私たちの調査研究はいまだ道半ばである。たとえば、シャカル・テペ遺跡 I 号丘では、遺丘の奥深くに前 5 千年紀と目される文化層が眠っていることは確実視されるものの、技術的・時間的制約からその発掘には至っていない。また、前 6 千年紀前葉の様相も未解明のままに残されている。今後も弛みなく追究の努力を継続し、新石器化から都市化への移行プロセスにおいてこの地域が果たした歴史的役割の理解へと、着実に迫ってきたい。

なお本調査は、日本学術振興会科学研究費(課題番号: JP23H00692、JP21KK0008、JP25KJ0027)の助成を受けて実施した。

#### ■参考文献

・ Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer and H. Hama Gharib 2023a Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022). *Ancient Civ-*

*ilizations and Cultural Resources* 1: 1-22.

- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2020 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019. *Neo-Lithics* 2020: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiki, N. A. Mohammed and K. Rasheed 2023b Late Prehistoric Investigations at Shakar Tepe, the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Results of the First Season (2019). In N. Marchetti et al. eds., *Proceedings of the 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, vol. 2: Field Reports, Islamic Archaeology*, 415-428. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, Y. Itahashi, M. Oda, R. K. Salih and H. Hama Gharib 2025 Halaf and Late Chalcolithic Occupations at Shakar Tepe in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the 2023 Excavations. *Archaeological Research in Asia* 41: e100592.
- ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuys and S. Mühl 2019 From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain. *Paléorient* 45(2): 67-83.
- ・ 小高敬寛・前田 修・三木健裕・早川裕弐・H. N. ファッタ・H. ハマ ガリーブ 2025 「新石器化と都市化のはざま—イラク・クルディスタン、シャカル・テペ遺跡の第3次発掘調査(2024年)—」『第32回西アジア発掘調査報告会報告集』35-39頁 日本西アジア考古学会。